同性愛者との接触場面における態度の検討

○織田倫子¹・宇井美代子²・中里克治³

(¹ 武蔵嵐山病院・² 玉川大学文学部・³ 東京福祉大学大学院)

キーワード：同性愛、接触場面、態度

The attitudes toward sexual minority in a postulated counseling situation.

Michiko ORITA¹, Miyoko UI² and Katsuharu NAKAZATO³

(¹ Musashiranzan hospital, ² College of Humanities, Tamagawa Univ., ³ Tokyo Univ. and Graduate School of Social Welfare)

Key Words: Sexual minority, Postulated counseling situation, Attitudes

目 的

自分が「同性愛者である」という気付きは青年期に多くみられる。この青年期に多くの時間を過ごす学校場面で同性愛者は人間関係形成の困難さや居心地の悪さを感じ(渡辺, 2005)、時にメンタルヘルスの悪化を招くことがある(日高, 2000, 2007)。同性愛者のメンタルヘルス悪化後のフォローには、臨床心理士(以下 CP)の適切な対応が必要である。品川・兒玉(2005)は、男性 CP を対象とする質問紙調査を行った結果、潜在的に同性愛者に対し回避的な態度を示している可能性や、同性愛者への介入は避けがちな態度をとる可能性を示唆した。また、品川(2006)は、同性愛嫌悪が強い CP は、同性愛の男性クライアント(以下 CL)の心理社会的機能を低く評価することや、男性 CP は同性愛の男性 CL の予後をネガティブに評価し、面接を快くなくと感じることを示唆した。以上の結果は、CP は CL の性的指向を特別視した上で CL の状態を評価していることを示している。この結果は CP が抱く日常場面での同性愛嫌悪が接触場面に持ち込まれている為に生じている可能性がある。

そこで、本研究として日常場面における同性愛への態度が接触場面に及ぼす影響を明らかにすることを検討する為に、同性愛者との接触場面における態度を検討した。

方 法

研究対象: 将来、援助職に就くことを志望している大学生・大学院生を対象とした 281 名(男性 100 名、女性 181 名)、平均年齢 22 歳(18 歳から 52 歳)であった。**分析項目:** 1. 同性愛への態度(和田, 2009)嫌悪・拒否($\alpha = .82$)、ネガティブ・イメージ($\alpha = .78$)、容認($\alpha = .80$)の 3 側面に対して 5 件法で回答を求めた。2. 接触場面に関する模擬事例文(異性愛条件・同性愛条件)(品川, 2005)異性愛条件では「トシオ」が「マサミ」と同様後別れ、次に「カズコ」と付き合い別れた後にうつ様症状が出現した模擬事例文を提示した。尚、同性愛条件では「マサミ」を「マサオ」、「カズコ」を「カズマ」に変更して提示した。この模擬事例文を読み、次の項目に 7 件法での回答を求めた。項目内容は、責任追及「トシオがこのような状況に陥ったのは、彼に責任がある。」、同情「トシオは同情に値するし、わかってあげたいと思う。」、危険視「トシオは周囲の人々にとって危険な人物である。」、治療勧告「トシオは薬物療法を受けたほうがいいと思う。」、共感「何かに苦しんでいるトシオの気持ちを感じ取ろうとし、自分も同じような気持ちになると思う。」他 3 項目($\alpha = .70$)、紹介「トシオを途中で他のセラピストに紹介して任せる」、同席回避「もし自分が出席する予定のパーティにトシオも出席するとわかったら、出席をとりやめる。」である。尚、1. も 2. も α 係数を高める為、原論文から項目を一部削除した。

結 果 と 考 察

最初に異性愛条件と同性愛条件の対応の変化を検討する為、接触場面である異性愛条件と同性愛条件について対応のある

t 検定を行った結果、品川(2006)や品川・兒玉(2005)が指摘したように同性愛嫌悪がみられ、異性愛条件より同性愛条件のほうが同情せず、危険視し、共感せず、他の CP に紹介し、回答者は同席を回避した(Table1)。次に、接触場面の態度の変化が日常場面の同性愛に対する態度と関係しているか検討する為、まず異性愛条件の得点から同性愛条件の得点を引き、異性愛条件と同性愛条件の差を算出し、各項目の異性愛条件と同性愛条件の態度の変化の大きさと方向性を求めた。接触場面である異性愛条件と同性愛条件の差と、日常場面である同性愛への態度の相関係数を算出した結果、同性愛に対し嫌悪・拒否感情を持つ人やネガティブ・イメージを持つ人は異性愛条件よりも同性愛条件により責任追及し、同情せず、危険視し、治療勧告し、他の CP へ紹介をし、共感せず、回答者は同席を回避した。同性愛に対し容認的な人は、異性愛条件よりも同性愛条件のほうに共感し、他の CP に紹介せず、回答者は同席を回避しなかった(Table2)。

先述のように、品川・兒玉(2005)や品川(2006)は CP による同性愛への特別視を示唆した。本研究の結果においても「同性愛」という条件により CL を適切に捉えられなくなり、その結果、同性愛の CL をネガティブに評価してしまっていることが示唆された。また、同性愛に対する容認度とは責任追及、同情、危険視、治療勧告と無相関であった。これは、同性愛に対し容認的であっても、人によっては接触場面で同性愛に偏見を持って対応してしまう可能性を示唆している。

Table1 接触場面である異性愛条件と同性愛条件の t 検定

項目名	異性愛条件		同性愛条件		t 値	N
	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
責任追及	3.79	1.15	3.77	1.21	0.21	266
同情	4.81	1.11	4.51	1.20	5.07 **	266
危険視	2.49	1.26	2.64	1.34	-2.73 **	266
治療勧告	3.37	1.54	3.37	1.54	-0.28	265
共感	3.96	1.12	3.55	0.99	5.68 **	191
紹介	3.04	1.28	3.27	1.42	-4.26 **	263
同席回避	3.04	1.79	3.31	1.82	-4.34 **	266

** $p < .01$

Table2 同性愛への態度と、異性愛条件と同性愛条件との差の相関

項目名	嫌悪・拒否	ネガティブ・イメージ	容認	異性愛条件と同性愛条件の差の平均		N
				平均	標準偏差	
責任追及	-.21 **	-.15 *	-.03	0.01	0.87	266
同情	.23 **	.32 **	-.08	0.29	0.92	266
危険視	-.22 **	-.29 **	.04	-0.17	1.03	266
治療勧告	-.13 *	-.14 *	.01	-0.02	0.88	265
共感	.17 **	.14 *	-.13 *	0.11	0.83	265
紹介	-.19 **	-.22 **	.15 *	-0.24	0.91	263
同席回避	-.26 **	-.25 **	.17 **	-0.26	0.99	266

** $p < .01$, * $p < .05$

引用文献

- 日高庸晴(2000).思春期学,18(3),264-272. ■日高庸晴(2007).女性学評論,21,49-66. ■品川由佳(2006).広島大学大学院教育学研究科紀要,3(55),297-306. ■品川由佳・兒玉憲一(2005).日本エイズ学会誌,7(1),43-48. ■和田実(2010).心理学研究,81(4),356-363. ■渡辺大輔(2005).教育学研究,72(2),210-219.